

これからの世界史教育

— 指導報告を通じて —

梶田 信之

Nobuyuki Kajita

はじめに

高等学校における世界史の授業とはどうあるべきか、それは高校教員として三十年以上が経過した今も毎年のように悩み、少しずつではあるが自らの意識と授業展開・授業内容・配布プリントを変化させながら現在も追求し続けている、とてつもない難題である。教員サイドが最終的に何を目指し、授業を通じて生徒をどう導いたら良いか、歴史の考察と受験指導をどのように両立させるべきかなど追求すべきテーマは多い。それが日本史であろうが世界史であろうが、人類の過去からの歩みを理解させることは学問上とても大切なことである。数えきれないほど多くの失敗と犠牲をはいりながら、過去の蓄積の上に現在が築かれてきたことを生徒にしっかりと認識

させ、今も繰り返され続ける多くの失敗や課題をどう克服して未来を考え先に進むべきか、生徒一人一人がしっかりと考えられるようにすることが歴史教育の原点ではないだろうか。まさしく過去の歩みを知り、現在の諸課題を理解・認識し、未来を模索することである。次期学習指導要領では「総合歴史科目を設け、世界とその中における日本を広く相互的な視野から捉えて、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察する」という方向性が検討されているようである。日本史と中国史・台湾史・朝鮮史・東南アジア史・欧米史など、日本史教育と世界史教育の結節点を意識しつつ、歴史教育と公民教育の結節点にもしっかりとした捉え方をすべきであろう。

今回の指導報告を通じてこれまでの授業や教科指導を振り返りながら、あらためて私自身が「これからの世界史教育について」考える貴重な機会にしたいと考えている。

歴史は暗記科目

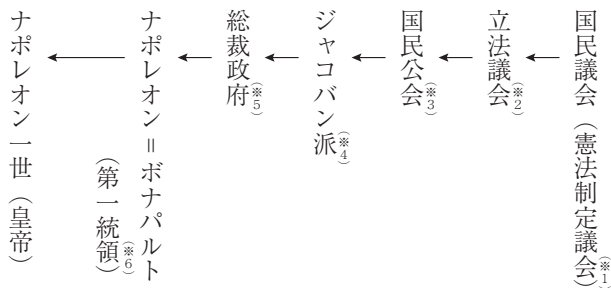
「日本史にせよ世界史にせよ、歴史は暗記科目だから年代・歴史上の人物・事件などを丸暗記すれば良い。」と思っているのは生徒だけではないようだ。それに反して歴史を担当する教員の多くは「歴史は流れが大切である」という言葉を繰り返して使う。私も生徒

を前にまずは「流れを理解する」ことを強調してきた。歴史上の大事件や転換点となる事象は、何の前触れもなく突然始まるわけではない。歴史的背景・原因・契機から大事件や歴史事象への繋がりをしっかりと意識した上で、その出来事がどう展開（経過）し、どのような結果がもたらされ、さらに次の時代や出来事にどのような影響を与えたかをつかまなければならない。断片的な単なる知識の詰め込みにしなければならない。つまり歴史を「物語」と考え、そのストーリーを把握させなければ入試対策上も通用しないのである。「一に暗記、二に暗記」ではなく「一に理解、二に（最後は）暗記」ということを、いかに授業や定期テストを通じて強く認識させられるかが歴史教員として大きな課題なのではないかと考えてきた。そうした中で自然に「なぜ」「どうして」と考えるような生徒が増えていくことが理想であろう。

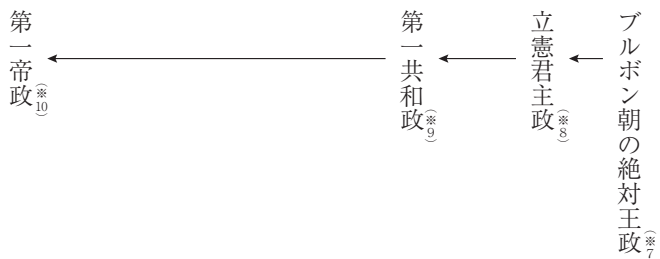
十六世紀から定着したアンシャン・レジーム（旧制度）の諸問題を背景に、絶対王政の矛盾に根ざして始まったフランス革命からナポレオン時代を一例として挙げてみたいと思う。誰もが知るフランス革命は、多様な対立をはらみながら大変複雑な経過をたどるが、この革命によって絶対王政は打倒され、市民の封建的束縛は撤廃される。民主化など多くの改革の実現は後世に託されることになる。近代市民社会の原理が浸透して自由主義改革により有産市民の主張が貫徹された点などから、世界史上の大きなターニングポイントとなった大事件である。生徒はどうしても詳細な革命の展開に目が行きがちであるが、最も大きなポイントは政治権力の移行過程と

政治体制の変遷である。

①政治権力の移行過程



②政治体制の変遷



政権も政体も契機となる出来事を経て移行・変遷する。フランス革命期からナポレオン時代にかけての数多くの歴史事象の中でも、その契機となる出来事に向かう動きをしっかりと理解・整理しなければストーリーにはならないのである。また革命勃発とされるパリ市民によるバスティーユ牢獄襲撃から三十一日後、国民議会は農村における暴動を抑えるために「封建的特権の廃止」を宣言した。収

入による免税特権を否定し、農奴制・領主裁判権・教会への十分の一税などを無償廃止して農民の人格的自由を認めた。しかし貢租（封建地代）の廃止は二十〜二十五年分の年貢一括払いを条件としたため、総人口の八十五%以上を占めた農民のほとんどは土地を所有する自作農となることができず、不満は解消されなかったため革命は以後も継続された。その約十四年後、国民公会の主導権を握った山岳派は、農民層の革命支持を拡大するために「封建地代の無償廃止」を実施した。その結果、農民が土地を取得したことによってこれ以上の革命継続を望まなくなり保守化していくのである。大学入試でも問われやすい「理解」と「整理」が必要な視点の一つである。前記のような流れは、常と同じタイミングで提示する訳ではない。この時代の場合であれば、ナポレオンがブリュメール十八日(※1)のクーデタで総裁政府を打倒して、任期十年の統領三人が行政権をもつ統領政府を樹立し、自ら第一統領となつて独裁的権力を掌握した後、「フランス革命の終結が宣言」された段階を見計らつて示すようにしている。

一方で古代ローマ史の場合は、共和政ローマと帝政ローマの時代に大別し、さらに共和政時代は貴族共和政から民主共和政への移行、帝政時代は前期帝政（元首政）から後期帝政（専制君主政）への移行、民主共和政から前期帝政への過渡期に内乱の一世紀を位置づけて最後の整理・まとめに使用することもできるし、ローマ史の導入に提示することもある。とかく細かい歴史事象のみを意識しがちな生徒に、大きな歴史の流れを示すことで理解・整理の重要性を

認識させることが重要である。

遠い過去の話であるが、中学時代の歴史で毎回のようにな百点に近い点数を取る級友がいた。ある時、どうしたらそんなに高得点を取れるのか尋ねたことがある。彼女は涼しい顔で「教科書を破れるまで読むのよ。」と答えたのを、当時から四十年以上が経過した今でも鮮明に記憶している。「破れるまで」は少し誇張した表現であるにせよ、中学・高校時代を振り返ると歴史の教科書ほど理解しづらいものはなかったように思う。教科書はすべての繋がりを把握した歴史の専門家が、詳細部分をかかなり省略しつつまとめた教材である。予習や定期考査前に一度や二度読んで何が書かれているか理解できるなら、歴史教員としての仕事はほとんど無いと言っても過言ではないのではないかと思う。生徒には「授業をよく聞いて理解しなさい。」「理解できたら、なるべく早く早めに（その日のうちに）教科書をしっかり読みなさい。」と繰り返し強調する。そうして初めて教科書の内容を、あるいは「歴史の流れ」を理解できるのである。教科書だけでは読み取れない事もあるからこそ、授業中の集中力が大切なのである。さらに内容理解の過程で、記憶に残らなかった事を「最後に暗記」するのである。歴史を最初から最後まで暗記と考える生徒は、授業中の「集中」「理解」と地道な作業に感じられる「教科書を読む」という、最も基本的なポイントを疎かにしているにもかかわらず「暗記が苦手」と簡単に思い込み、時にはこれを公言する。「一に理解、二に（最後は）暗記」を今後も強調していきたいと思っている。

地理上(地図上)の理解

世界史は文字通り世界の歴史を概観する科目である。日本やイギリスが島国ではなかったら全く異なる歴史が刻まれたことは容易に想像できることであり、地理的な要因は世界史の考察・理解には第一歩と言えるのである。例えば生徒が最初に学習にする古代オリエント世界では、海と砂漠という自然の防壁に囲まれた閉鎖的地形のエジプトが、異民族の侵入を困難にして比較的安定した歴史を刻むのに対して、開放的地形ゆえに外部からの侵入が容易なメソポタミアでは、古くから複雑な民族興亡が繰り返される。この時代もいかにその民族・諸国興亡を「流れ」でつかむかが重要である。エジプトは平和と繁栄の三期(古王国・中王国・新王国時代)、メソポタミアはシュメール↓アッカド↓アムル↓ミタンニ・カッシートの興亡、アナトリアのヒッタイト、^(※13)ヒッタイト・エジプト勢力が後退した後の地中海東岸(シリア・パレスチナ)におけるセム語系3民族(アラム・フェニキア・ヘブライ)の活躍などを地域ごとに整理する。次にこの広大なオリエント世界を初めてアッシリアが統一することでオリエント世界を一体化させるのである。アッシリアの異民族支配は苛酷を極め、その支配は数十年で崩壊する。続いてアッシリアを滅ぼした2王国を含む4王国分立時代を経て、アケメネス朝ペルシアによるオリエント再統一が実現されるのである。ペルシア人は異民族に対する寛容な態度による支配で、アッシリアの統一期間をはるかに上回る約二百年におよぶ統一を維持したのである。地

理上(地図上)の理解と民族・諸国興亡の流れを理解した上で、詳細な歴史事象に注目させていかなければ古代オリエント世界の攻略は困難と言える。

効率的学習方法

ワープロですら遠い過去の物となり、パソコン・携帯電話(スマホ)が日常生活に浸透しきってしまっている今日では、教員である我々ですら文字を筆記用具で「書く」という機会が激減している。ひらがな入力であろうがアルファベット入力であろうが、わずかな文字を入力しさえすれば、過去の入力記録などから候補の単語が表示され、短時間で文章を作成することができる。下書きから清書までのすべてを手書きし、修正液を駆使し長時間かけて定期考査問題を作成していた時代に比べれば、何とも便利な時代になったものである。大学の提出レポートや卒論までがパソコンで作成され、データを送信して採点されると聞くと、漢字力の低下だけでなく様々な心配は尽きない。幸いにも我々高校教員が相手にするのは、大学生でも社会人でもない。筆記用具を使って「書く」という学問上最も基本的な動作を、ことさら強調できる最後の機会である。チェックペンで重要語句のみを塗りつぶし、試験前に「じっと眺めている」生徒をよく見かける一方で、余白がなくなるまで「びっしり書きまくる」生徒はほとんど見かけなくなった。「最後は暗記」の過程で、私は「できれば声に出しながら繰り返し書く」ことを勧めている。

視覚のみではなかなか頭に定着しないものである。発声することは視覚だけでなく聴覚も駆使し、聞き慣れない歴史用語も印象に残りやすい。言葉で言えるようにした上で、それをしっかりと正確に文字化できるようにしなければ、いくら流れを理解して「眺める時間」を費やしても効率的な学習とはいえないからだ。

確認テストから入試問題演習

私は始業チャイム直後の五分間、つまり授業の導入時間が授業担当教員として何より大切な時間だと思っている。一年生から三年生まで生徒が受講する授業や時間割のパターンは実に多様である。登校後の一時限目がいきなり世界史の場合もあれば、体育で精いっぱい運動してきた次の授業が世界史かもしれない。芸術科目の後、昼休み直後など様々なパターンがある中で、いかに前時に扱った内容を思い起こさせ本時に繋げるか、本時のテーマやポイントは何なのかをできるだけすんなり行ないたいと考えてきた。生徒のペースに合わせて切り替えの時間を取っていると、五〇分間の授業時間のうち実際に講義をしている時間は非常に短くなってしまふからだ。一斉に前時の内容をいくつか発問して数名の生徒に答えさせていた時であれば、一方的に前時を簡略化して黒板に示していた時もあったが、どうにもしつくりこなかった。そうした中で、授業開始の挨拶直後に、B6の確認テスト用紙を毎時間配布して五〜十問の問題を解かせることを数年前から現在まで続けている。授業が一コマ終

わるたびに小テスト問題を作成し、担当クラス全員分を毎回印刷して教室に持っていくという多少の手間を感じるが、これは予想もしなかった光景を目の当たりにすることとなった。小テストは回収・採点するわけではなく、わずかな時間が経過した後に、解答を次々と口頭で述べていくだけのことである。全問不正解、一問も答えられず手つかず状態の生徒も見かけたが、毎回同じように授業開始時のパターンにしていくとある変化が見られるようになる。私が教室に入るとそこには前時のノートを全員が見て、周囲で問題を出し合っているのである。黙々とメモ用紙に歴史用語を書き続けている生徒も出てくる。切り替え・短時間でも前時の内容を振り返る・チャイム着席など様々な効果を生み出していることに驚かされたのである。どんな教科にも言えることであろうが、特に歴史は「ほったらかしの溜め込み」だけは避けたい科目である。授業中に理解したことや印象に残った出来事も、時間が経てばどんどん忘れていくものである。「授業を集中して受け、理解する」ことが第一であるが、次に大切なことは「早い段階で教科書を読む」ことであり三〇分間でも授業があったその日のうちに「復習する」ことなのである。定期考査前にいくら時間を費やして詰め込んでも、所詮は実力にはなっておらず次の日には再び忘れてしまう付焼刃的なものである。前にも述べたが、この積み重ねができない生徒にかぎって「暗記は苦手」と思い込んでしまうのである。授業確認テストの実施・継続は、たとえ短時間でも「ほったらかしの溜め込み」をさせないという思いから始めた導入の五分間なのである。毎週末の課題と週明け

テストを繰り返して、定期検査を受けっぱなしにさせずに事後の解き直しをさせ、ひと区切りのタイミングを見計らって入試問題を提示していくと、日頃の授業や短時間の復習の積み重ねこそが実力向上の唯一の方法と気づくのである。全国模試で偏差値六十を超えていく生徒が増えていくと、その方法の説得力は言うまでもないことになってくる。「試験に出るから仕方なく丸暗記」してもなかなか成果は挙がらず、「理解して積み重ねたことが成果として数字に表れてくる」と生徒はやる気になるのである。そういう意味で定期検査の役割は非常に重要なのである。流れを意識・理解して積み重ねた生徒は高得点をとれるが、直前からの単なる詰め込みの丸暗記では目指した半分もとれない問題を考えなくてはならないのである。定期検査後に自分の学習方法の失敗を反省し、次の範囲から授業の受け方・日々の復習などに変化がみられることが大切であろう。

さらに欲を言えば、論述・記述問題にも通用する総合的な学力を身につけさせることができれば理想なのかもしれない。東京大学の入試で「一八三〇年代のヨーロッパについて、三百五十文字以内で論述しなさい」と出題されたことがある。まずは一八三〇年代を世界史上どうとらえるかがポイントであり、フランス革命からナポレオン時代にかき乱されたヨーロッパの国際秩序を、革命前の状態に復活させようとした復古・反動体制（ウィーン体制）が動揺し始めた時期であることが即座に思い浮かばなければ論述はスタートできない。結果的にはナポレオンがヨーロッパに波及・拡大させたリベリズムとナショナリズムの精神を抑圧しようとした国際体制も、

一九四八年の崩壊に向けた動きが顕著になるのが一八三〇年代のヨーロッパなのである。この大きな視点を明確にした上で、フランスの七月革命、ベルギーの独立、ポーランド・ドイツ・イタリアの反乱、イギリスの第一回選挙法改正など主要各国の動向を記述しなければならぬ。まさしく流れやつながりを意識した学習と、詳細な各国の状況を理解していなければ制限字数の半分も答えられない問題である。もちろん論述・記述問題は、時間をかけて解き慣れていく要素も多分にあるのだが。

おわりに

決して自慢話ではなく、今でも教材研究なしで授業に臨むことは一時間といえどももない。以前で言えば板書事項、現在で言えば教材プリントも少しずつ工夫・変化させながら、何年経っても「改良の余地あり」である。ある歴史事象をまとめるにも、用語集のように「○○事件…その説明文」とまとめるより、「○○を背景（契機）に○○のような事件が発生…これを○○事件と呼ぶ」とまとめ順を入れ替えるだけでもその事件の内容や名称が生徒の印象に残りやすくなる。すべてに通用する手法ではないし、単なる一例にすぎない方法だが、同じ内容を繰り返し説明していく中にもちよつとした改良を試みている。教科書の注釈・図説・地図・エピソードなども「どのような順で展開し、どのタイミングで何を盛り込むか」で生徒の反応は顕著に変わるからだ。三十年以上も教壇に立ちながら、

まだまだ自らの勉強不足や説得力の欠如を反省しながら「より良い授業」を模索する日々である。

現在、最大のテーマは「世界史の授業におけるアクティブ・ラーニングの方法である。公民科の授業では比較的導入しやすく感じられたグループ・ディスカッション、デイベート、グループ・ワークなどを世界史の授業にどう応用していいのか、近年意識しながらもなかなか実践できないもどかしさを感じている。

この度、あらためて自らの授業・教科指導を振り返る貴重な機会を与えていただき感謝するとともに、同教科だけでなく教科を超えた視点から率直なご意見をいただけたら幸いである。できることなら大いに議論を交わし、お互いの授業・指導のプラスになることを心から願っている。

【注】

- ※1 総人口の九十八%を占めていた平民（第三身分）代表が、三部会（フランスの身分制議会）から分離して結成した議会。一七八九年七月九日に憲法制定（国民）議会と改称された。
- ※2 一七九一年憲法に基づく制限選挙により成立した議会。民衆の不満から勃発した八月十日事件による王権停止後、解散した。
- ※3 フランス初の男性普通選挙により、立法議会にかわり設立された議会。
- ※4 国民公会で主導権を握った急進共和派（恐怖政治を展開した山岳派）。
- ※5 共和国第三年憲法（一七九五年憲法）に基づく、五人の総裁で権限を分担した共和政府。
- ※6 コルシカ島生まれの軍人で、軍事的成果を重ねた後のブリュメール十八日（※10）のクーデタで総裁政府を打倒、統領政府を樹立して第一統領となり独裁権を握る。一八〇二年に終身統領、一八〇四年には圧倒的支持を背景に国民投票で皇帝に即位した。流刑地のセントヘレナ島（南大西洋の孤島）で一八二一年に没した。
- ※7 一五八九年のアンリ四世に始まるフランスの王朝。ルイ十四世時代に最盛期を迎えるが、ルイ十六世時代の財政破綻からフランス革命を招いた。
- ※8 憲法に基づく君主政。フランス史上初の一七九一年憲法に基づく立法議会の誕生により成立した。
- ※9 国民公会による王政廃止・共和政樹立宣言からナポレオンの皇帝即位までの期間におけるフランス史上初の共和政治体制。
- ※10 ナポレオンの皇帝即位から失脚（一八〇四年から一八一四年）までの政治体制をさすが、最初の流刑地エルバ島を脱出した後の一時的なフランス支配（百日天下）を含める場合もある。
- ※11 国民公会により採択された革命暦（共和暦とも呼ばれる）。グレゴリウス暦では十一月九日にあたる。共和政が開始された一七九三年十一月から施行され、一八〇六年一月にナポレオン一世の提唱でグレゴリウス暦に戻されるまでの約十三年間のみ使用された。共和政開始の一七九二年九月二十二日を紀元として、一年は一月を三十日とする十二カ月（三百六十日）と「サンキュロ

ツトの日」と呼ばれる祝祭日五日（閏年は六日）を合わせて三百六十五日（閏年は三百六十六日）とした。サンキュロットは小商店主や職人など都市民衆を指す呼称で、彼らが貴族やブルジョワのキュロット（半ズボン）着用に対して長ズボンを着用していたことから呼ばれた。

※12 ヨーロッパから見た「日の昇るところ」を意味するラテン語。古代文明が発祥したエジプト・メソポタミア、両文明地帯を結ぶ交通路にあたるシリア・パレスチナ、ほぼ現在のトルコ共和国に該当する黒海・エーゲ海にのぞむ半島部分であるアナトリア（小アジア）などのアフリカ北東部から西アジア一帯を指す。

※13 古代オリエントで強勢を誇ったインド＝ヨーロッパ語系民族・国家。紀元前十七世紀中頃、ハットゥシヤ（現在のボアズキヨイ）を都に王国を建て、アムル人のバビロン第一王朝を滅ぼした。初めて鉄製武器を使用し馬と戦車を駆使して、紀元前十四世紀には全盛期を迎え、シリアをめぐる新王国時代のエジプトと対立・抗争した。紀元前十二世紀「海の民」や外敵の侵入、内紛によって滅亡したとされている。

【参考文献】

○『世界史辞典』 山川出版社

○『世界史用語事典』 三省堂

【参考文献】

○『教養人の世界史』 社会思想社

○『世界史図録』 ヒストリカ（流れ図ノート） 山川出版社

○『アカデミア世界史』 浜島書店
 ○『教師論』 福村出版
 ○『共生への学び』 ダイヤモンド社